

DETEL, Wolfgang(Übersetzt u. Erläutert von): *Aristoteles Analytica Posteriora*(Aristoteles Werke in deutscher Übersetzung, 3, II/1, 2), 2 voll., Pp. 438+888, Akademie Verlag, Berlin, 1993. DM 248.

本書は、今世紀半ばから、Akademie Verlag より刊行されている註釈付きド

ドイツ語訳アリストテレス全集の第3巻の後半(3. II)にあたる。(第3巻は『分析論』で、前半(3. I)はG. Striker 担当であるが、現在のところ未刊である。)当初、本書は、1991年に刊行とアナウンスされていたが、若干遅れて刊行された。1991年の時点で、本書担当のDetelは、ハンブルク大学におり、ハンブルクをはじめ、フラクフルト・アム・マインでのゼミナールや、プリストン、コロムビア(New York)等の諸大学での研究の成果が本書である。本書刊行の時点で、Detelはフラクフルト・アム・マインに移っているようである。すでに昨年の本欄で取り上げられた、研究書の体裁をとるMcKirahan(1992)や、翻訳と註の体裁をとるApostle(1981), Barnes(1975, 1993²)のなどの英語圏のもの、また、第1巻のみのMignucci(1975)の註釈(現時点において、A巻のみであるが、このMignucciのものが最も詳細な註釈である。コメントリのみで、674ページある)を別にすれば、本書は、現時点で、ドイツ語圏のものとしてはじめて、その規模と詳細さという点において、『分析論後書』全二巻に互る註釈書としては、『分析論』全体に互るRoss(1949)のものに匹敵する本格的な、そして『後書』だけについて言えば、Ross以上に詳細な註釈書である。

本書は、2分冊からなり、第1分冊には、はじめに訳文を取め、続いて、註釈に先立って232ページにおよぶ序論、そして付録として、文献表、序論とテキストの箇所を対照する索引、主な訳語を並記したギリシア語のグロッサリーを取める。訳文は、原文に忠実、つまり、直訳的で、ドイツ語としての善し悪しについては判定しかねるが、少なくとも初学者がギリシア語原典と対照しながら読むには、ギリシア語をどのように読み解いたのかを逐語的に知ることができるという点で役に立つであろう。序論については後述する。第2分冊は、全体が註釈である。本全集では、早く刊行されたDirlmeier担当の2つの『倫理学』では、註釈の原典の箇所の表示が、訳文のページ・行数であったので、少々不便を感じたが、本書は、慣用のベッカー版のそれに変更されている。註釈そのものは、各章ごとに、全般的註(Allgemeine Anmerkung)、書誌学的註(Bibliographische Anmerkung)、特別註(Spezielle Anmerkung)の3つの部分に分けられているのが特徴である。全般的註は、その章全体のシュノプシスにあたる。書誌学的註は、つまり、文献学的註であり、古註にはじまり、近現代までの註釈書、研究書、論文などによりながら、当該箇所の解釈史を述べている。章によっては、詳細すぎると思われるところもあるが、中には、要を得て簡潔にまとまっている章もあり、この部分も初学者にとっては、有益なものであろう。特に、近世初頭のラテン語註釈の中で、ザバレラのもものが、頻繁に言及さ

れている。なお、A巻のこの部分は、Mignucciの註釈以前のものについては、Mignucciのものを出ず、DetelもMignucciによるところが大きいのではないか、と思われる。特別註は、問題となる個々の箇所についての註釈であり、Detelの解釈もここに示される。

まず、第1分冊の序論はほとんど研究書と言ってもよいほどで、全体は6つの部分からなる。以下に、それを示す。1.『分析論後書』のテキストについて(1.1. 諸写本とその校合調査, 1.2. 年代決定の問題)、ここでは、『前書』と『後書』の関係について、両方とも比較的後期のものであり、現行の『後書』は『前書』を前提する、としている。2. 歴史的背景(2.1. 前4世紀におけるアテナイの経済的狀態, 2.2. 前4世紀におけるアテナイの外交情勢とアリストテレスの生涯における諸滞在地, 2.3. 前4世紀におけるアテナイの民主制の発展について, 2.4. アリストテレスにおける修辞学と学知, 2.5. 修辞学における説得と論証, 2.6. ディアレクティケーと学知)、ここでは、かなりの紙数を割いて、前4世紀アテナイの社会情勢を述べ、その中での修辞学の説得の術という点を強調し、これと類似する対人論法としてのディアレクティケーは、確実な原理に基づかず、通念(エンドクサ)による故に、しかし、同時にそれ故にかえって、論証知としての学知に原理的に先立って必要であるという程度にしか評価しない点に不満が残ると思うのは、私だけだろうか。3. 学問的論証の論理学(3.1. 演繹と論証, 3.2.(三段論法的)推論の特徴, 3.3. 個体の概念をともなった演繹, 3.4.(三段論法的)推論の適用可能性, 3.5. 証明の再構成(II, c. 11, 94^a28-34), 3.6. 様相と充足原理の関係)、4. 幾何学的抽象：数学の位置付け(4.1. 幾何学者が扱う問題, 4.2. 幾何学的抽象の二義性, 4.3. いかなる幾何学的対象が基礎にあるか, 4.4. 特定の幾何学的対象は、基礎にある幾何学的対象といかなる関係にあるか, 4.5. 個別的幾何学的対象の存在, 4.6. 抽象主義の問題)、5. 知覚と帰納(5.1. 可謬性の問題, 5.2. 包括的、付帯的感覚, 5.3. 観察, 5.4. 『分析論後書』におけるエバゴージェー, 5.5. アリストテレス的エバゴージェー：推論か方法か, 5.6. アリストテレス的エバゴージェー：発見的方法と可謬性)、事例を枚挙し尽くした完全な帰納推理でない以上は、結論の確実性を保証するより高次元の原理が必要であるから、『分析論後書』でのエバゴージェーに、方法としての不完全性を認め、消極的な評価を下している。6. 結論(6.1. 『分析論後書』についての主要解釈, 6.2. アリストテレスの学問論についての新しいイメージ、主な項目は、学習、帰納、洞察(ヌースの直観)、分析、抽象、必然性、論証、誤謬、結語)。ここでは、アリストテレスの学問論、知識論の解釈を、Popper, Lakatosらを援

用し, axiomatisch-fundamentalisch-essentialistisch(AFE)な解釈, induktiv-pädagogisch(IP)な解釈(Barnes, 1975), Vertiefungstheorem(VT)(Lesher, Kosman, Burnyeat)に分けて諸家の文献を直接引用して紹介するが, 紹介に徹しており, 最も紙数を割いているAFEに与しているようである。個々の箇所の註釈においては, 注目すべきものもあるが, 全体として, Detel自身も言うように, 明確な解釈が示されずに, 問題として残る, として放置されているものがあることに不満を感じる。この点は, 今後さらに詳細に検討を加えねばならないが, 現時点において『分析論後書』の研究には, ぜひ参照すべき文献のひとつであろう。

赤井 清晃(京都大学)